

## 書 評 Book Review

Human Sex Determination. An Historical Review and Synthesis.

Ronald Wells, Riverlea Publishing, Tharwa, Australia  
ISBN 0731693744, 1990, pp. 240 (A4 判)

ヒトの出生時にはどの人種でも男児が女児よりも5%多い。この現象は哺乳動物の大部分に見られるが、鳥類の一部、ことにオームではこの性比が逆転する。書評をするために読み流して上記の記載を見つけた。読み終わって念のためにチェックしようと探したら見つからなかった。この事実が本書の長所、短所を現している。出生時の性比に関する膨大でエキゾチックな資料が収録してあるが、索引が3ページに過ぎないために短時間に探し当てられないのである。鳥類の性染色体はヒトの場合とは反対で、雌がZWでヘテロ、雄がZZでホモである。これが性比が逆転する理由かもしれないと考えたが、この点については本書では触れていない。

本書は出生時の性比に関与する生理学、疫学、社会学、季節的要因について Plato から1988年に至る1,000以上の文献を引用し、29の表を用いて記載してある。図は序文にひとつあるのみで、本の大部分は字で埋められており、読み通すには忍耐が要る。本書は歴史的事実と疫学的観点から見た記載は詳細だが、近年の文献の涉猟と批判には欠けるところがある。したがって本書は性比の研究の歴史書として用いるのが適当であろう。

目次を紹介する。1) ヒトの性行為、受精と性決定の遺伝学的基盤、2) 受胎時と出生時の男児の過剰、3) 親の年齢、児の出生順位、性交の頻度、4) 季節的変動、5) 射精と排卵の時期との関係、6) ゴナドトロピンその他の性ホルモンとピル、7) 女性のオーガズムと性比、8) 戦争、社会経済的諸因子、遺伝と人種、9) 親の利手、薬剤、病気と非嫡子、10) 古代の文献、11) 近代の神話、12) 人工受精、体外受精、X精子、Y精子の分離、13) 総合、14) 男女の産み分け。

著者はロンドンの獣医学部で生殖生理学を修めた後に医学部を卒業し、イギリスで専門医を10年経験した後にオーストラリアに渡り、各種の管理職を経ている。疫学を専門とし、性比に興味を抱いたのは Canberra Community Hospital で産れた児の数が木曜日には通常より20%多く、日曜日には30%少ないことに注目し、医学的因子以外の因子が働いている可能性を追究したことに始まるという。ここまで書いたら、評者がかつて人工流産胎児の染色体分析で経験した現象を思い出した。ヨーロッパの研究室で910例の人工流産を分析し、23例の染色体異常を得たが、染色体異常のうち3例は続けて出たのである。これは推計学的分析をするまでもなく異常な現象なので調査したところ、患者側の条件によることが判明した。ヨーロッパでは夏に一斉にバケーションをとるが、休暇に出かけた独身女性が避暑地での sexual activity の産物を急いでおろしに来たものであった。その結果、通常より早く人工流産し、早期の人工流産は染色体異常の頻度が高いから、これが秋にクラスターとなって表れたのであった。

本書を短縮し、図を加えて読みやすくした通俗版が出ているとのことである (The Sexual Odds, by Dr. Ron Wells, Sally Milner Publ. Pty. Ptd., 17 Warf Road, Birchgrove, NSW 2041, Australia. ISBN 1863510052).

(山口大学医学部小児科 梶井 正)